

新聞の保存と利用
第2回資料保存シンポジウム講演集

国立国会図書館編
東京 日本国書館協会発行 1991. 12
198 p 26cm ¥2,200

新聞は、ある事件を遡及して調査する際には重要かつ貴重な情報源であるにも拘らず、発行部数が多く一日切の読み捨てという刹那的大量生産物であるとの認識が一般的と言いつつも過言ではないだろう。この本は、1991年3月27日に書名と同テーマで国会図書館において開催された講演の記録集であるが、図書館に限ることなく新聞制作者、マスコミ研究者、さらに文書館も視野に入れており、新聞保存の意義と現実の新聞の保存と利用の取り組みを知ることができる内容になっている。

例えば、新聞の保存方法としては、媒体を変換しての保存（内容情報保存）と新聞原紙そのものの保存（全情報保存）とがあり、新聞の保存の考え方としての原紙そのもののモノとしての保存の意義は、モノ的情報である紙質・紙サイズ・印刷インク・製紙印刷製本技術とともに、歴史的情報としての所蔵者の書き込み（筆記具も含む）等が残されていることから、新聞原紙の保存も重要であるという指摘や、内容情報保存のための代替メディアの開発の現状が載せられている。

文書館の収蔵史料の中に明治・大正・昭和初期の新聞原紙が含まれていたり、全国的レベルというより地域として稀少に残存した新聞群を有している機関も少なくないため、対応に苦慮している方には示唆深い。どうかご味読のほどを。内容は以下の通り。

〔新聞保存の国際的な動向〕〔第1部新聞保存の意義—つくる立場から、使う立場から—〕研究者から見た新聞コレクション／新聞製作者の立場から〔第2部新聞コレクションと図書館〕横浜開港資料館における新聞資料の収集と利用について／都立日比谷図書館における新聞の利用と今後の課題／外国新聞の分担保存／国立国会図書館における新聞資料の保存と利用〔第3部新聞保存の技術的展望〕メディア変換による保存／原紙保存技術の新しい展開〔具体的活動を紹介した特別寄稿の10編を含む〕

廣瀬 瞳・国立史料館